

「日常モラル」と「仕組みの理解」に視点をあてた情報モラル教育

—児童生徒の判断力育成の手立てを通して—

情報モラル教育研究会議

研究員 清田 賢治（川崎市立白幡台小学校） 平野 智久（川崎市立三田小学校）
助川 文洋（川崎市立宮崎中学校） 濱野 晃典（川崎市立富士見中学校）
指導主事 和田 俊雄

I 主題設定の理由

平成 26 年度「川崎市立小中学校における情報モラル教育に関する調査」では、小学校では約 3 割、中学校では約 9 割の学校で、SNS に関する情報モラルの問題が発生している。トラブルに対処したり、予防したりするための児童生徒の判断力の育成は、急務であると考ええる。一方、全ての教員に、情報モラル教育についての指導が求められているものの、その指導内容は多岐にわたり、「何をどのように指導したらよいかかわからない」という教員からの意見が多く聞かれる。また、小中学校における情報モラル教育の現状としては、外部講師等の授業だけに頼りがちな面もある。外部講師だけに頼らずに、担任等が指導できる誰にでもできる情報モラル教育を進めるために、多岐にわたる指導内容を焦点化する必要があると考えた。

そこで、今回の研究では、児童生徒に情報モラルにおける判断力を育成するために必要な指導内容を焦点化した教師の手立てについて研究することにした。本研究では、昨年度の平成 26 年度長期研究員による研究をより具体化し、研究主題を「日常モラル」と「仕組みの理解」に視点をあてた情報モラル教育として、児童生徒の判断力育成の手立てについて研究を進めることにした。

II 研究の内容

1 「日常モラル」と「仕組みの理解」に視点をあてて判断力を育成する

情報モラル教育で児童生徒に身に付けるべき力は、冊子「情報化社会の新たな問題を考えるための教材¹」には、「まず、情報モラルはその大半が日常モラルであり、それに加えて少しだけ情報技術の特性（基本的な仕組み）を理解しておくことが重要」と示されている。本研究では、児童生徒に判断力を育むことを目指し、「日常モラル」と「仕組み（インターネットの特性）の理解」に視点をあてた情報モラル教育を進めることとした。その視点とともに、児童生徒にはトラブルとなる原因について「なぜ、どうしてそうなるのか」や「安全でよりより使い方をするにはどのようにしたらよいか」を考えさせる指導をこころみだ。そのことにより、従来の禁止指導一辺倒だった情報モラル教育から、児童生徒がより主体的に学習に取り組むことで判断力の育成につながるのではないかと考えた。

2 「保護者との連携」に視点をあてて判断力を育成する

情報モラルを育成するためには、学校と保護者との連携が欠かせない。しかし、実際に学校と保護者の連携は容易ではない。そこで、本研究では情報モラルの授業を通して、学校と保護者との連携についての有効な手立てができるかどうかについて研究を進めることにした。

¹ 原克彦他著 「文部科学省委託事業 情報化社会の新たな問題を考えるための教材～安全なインターネットの使い方を考える～指導の手引」 株式会社情報通信総合研究所 2014 年 3 月

3 検証授業の実際と考察

(1) 検証授業1 小学校6年生 総合的な学習の時間「自分の進む道」

～インターネットの特性を知り、人生をより豊かなものにしよう～

①授業の概要

児童の実態

児童の7割が携帯電話やスマートフォン等の情報端末を自分専用として所有している。所有している8割が中学年より情報端末を利用し始めており、使い慣れている傾向がある。また、無料通話アプリ LINE などの SNS の利用は6割の児童に使用経験があった。LINE などによるトラブルに巻き込まれた経験を持つ児童は、幸いほとんど見られず、安全に気を付けていた様子であった。

本日の目標

- ・インターネットの「仕組み」を理解することを通して、より SNS を安全に正しく判断できる力を身に付ける。
- ・インターネットに残った情報や画像は、消すことが難しいため、内容によっては自分の人生を左右しかねない危険性があることを知るとともに、責任をもって情報発信することの大切さについて考える。

本日の展開

○学習活動	・指導上の留意点
○携帯電話やスマートフォン、携帯ゲーム機などを使ってインターネットに接続した経験や便利さ等を交流する。	・インターネットの良さを引き出すような言葉かけを行う。
○インターネットの良い使い方と自分の人生を不幸にしてしまった悪い使い方を知り、インターネットの特性を考える。	・学区内にある有名店のホームページやツイッターに挙げた不祥事の映像、実体験等を交え、インターネットの影響力や特性を実感させる。 ・インターネットの特性をキーワード化することで、印象に残るように工夫する。
○これから、身近に起こり得る問題から、どのようにインターネットを利用するのかを考える。	・キャリア在り方生き方教育の中での情報モラルの考え方として、日常モラルである「人に迷惑をかけないこと」や、「インターネットの仕組みに関わること」、「自分の価値を下げるような情報を残さないこと」を意識付ける。
○自分の人生をより豊かにするには、インターネットをどのように使っていくのかを考える。	・インターネットをよりよく使うことで、自分の豊かな人生につながる実感がもてるようにする。

②授業の考察 ～「日常モラル」と「仕組みの理解」に視点をあてた判断力を育成について～

インターネットの仕組みを理解させる手立ての一つとして、児童が書いたインターネットの良い所と、悪い所を付箋に書かせ、整理する中でインターネットの特性を4つの分類に分け、キーワード化する活動を行った(資料1)。

その結果、授業後の児童のワークシートからは、28人の中で全ての児童からキーワード化されたインターネットの4つの特性をもとに「メールやLINEは便利だけれど、写真を送るときよく考える。」等、インターネットの仕組みについて、理解が深まっている記述がみられた。

また、「インターネットの4つの特性から、使い方に気を付けようと思いました。」という単に使い方に気を付けるというような記述だけではなく、「良い所もたくさん覚えました。あらためてもっと考えて使っていきたい。」「のひみつを使って、中学高校大学などで、安全に使いたい」と、トラブルになる危険性を理解するだけではなく、インターネットをよりよく使うことで自分の人生を豊かにするような実感がもてるような児童の記述もみられた。

インターネットの仕組みを小学校の発達段階に応じて理解させる一つの手立てとして、キーワード化し、インターネットの特性に気付かせる学習を行うことで判断力の育成につながる事がわかった。

資料1 授業でキーワード化した、インターネットの4つの特性

インターネットの四つの特性
①画像や文章が「の」にる
②あつという間に「ひ」ろまる
③いろいろな人へ「み」せる
④いつでもどこでも「つ」ながる
インターネット「のひみつ」
で特性を覚えて、正しくよりよく使いましょう!!!

(2) 検証授業2 小学校2年生 特別活動(2) - (ウ)

～なかよしボードの使い方～

①授業の概要

生徒の実態

小学校低学年ということもあり、ほとんどの児童が携帯電話やスマートフォン等の情報端末を持っていない。また、日常的にインターネットを利用する児童もいなかった。しかし、ゲームによる通信機能を使用している児童はおり、今後インターネットを利用する機会が増えてくると考えられる。規範意識が高く、学校や学級の決まりを守っている児童が多い。一方で、低学年らしく自己中心的な面も見られている。学年が上がるにつれて、インターネットの利用が増えたときに、心配な面は考えられる。

本日の目標

- ・学級の一員として、お互いのよさを認め合い、友達とよりよい関係を築こうとする態度を育てる。
- ・インターネットの特性である公開性、記録性、流出性、非対面性の知識の土台となる考え方を、日常モラルの視点を生かして身に付ける。

本日の展開

○学習活動	・指導上の留意点
○クラスの「かきふわボード」を振り返り、そのよさについて話し合う。	・「なかよしボード」の良かった点が、インターネットの特性にもつながることを意識して板書をする。
○チクチクことばをもとに、けんかが起こってしまった例をみて、みんなでなかよく「かきふわボード」を使うには、どのようなことが大切か考える。	・チクチク言葉が入っている書き込みや、見た相手が悲しむような事例の書き込みを提示する。
○問題点を考え、ワークシートに自分の考えを記入し、クラスで話し合う。	・良い、悪いどちらともとれる書き込みを提示する。 ・自分にとって言われたら嫌だなと思う言葉に気付かせる。
○振り返り用紙に記入し、これからの生活で気を付けようとするめあてを考える。	・「なかよしボード」に書いた言葉は、そこに残り、友達が誰でも見ることができるので、友達の気持ちを考えて情報を伝えることの大切さに気付かせる。 ・「なかよしボード」の特性を確認する。

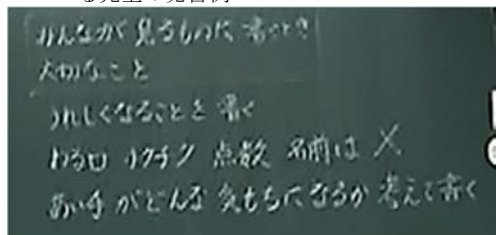
②授業の考察 ～「日常モラル」と「仕組みの理解」に視点をあてた判断力を育成について～

本時では、児童のほとんどが SNS 等を使用した経験がなく、インターネットを使用した経験もないという実態と小学校低学年という発達段階に応じた授業をこころみだ。教材の内容は、体験が浅いデジタルなものを意識したものではなく、日常の生活体験から将来のインターネット使用につながることを想起できるようなものとした(資料2)。学習課題は、「みんなでなかよくかきふわボードを使うにはどのようにしたらよいのだろうか」とし、課題を考えさせる場面において、「みんな見てくれている」「テストの点数をのせたらみんなにみられてしまうからおかしい」「かきふわボードに書いたら、あそこに残る」といった、公開性、記録性といったインターネットの仕組みつながるという児童の発言がみられた。また、「ちくちくことばは、かきふわボードにかくと残るから、けんかのもとになる」「相手がどう思うか考えてかく」「人の名前はのせない」といった、日常モラルとともにインターネットの仕組みの理解につながる意見もあった。これらのことから、小学校低学年から発達段階に応じた情報モラル教育を行うことで、児童の判断力の育成につながっていくことと考える。

資料2 授業で使用した「なかよしボード」
2年5くみ なかよしボード



資料3 インターネットの特性の理解につながる児童の発言例



(3) 検証授業3 中学校2年生 特別活動(2) - (ウ)

～インターネットを使用する時の標語を考えよう～

①授業の概要

生徒の実態

生徒の約7割が携帯電話やスマートフォン等の情報端末を自分専用として所有しており、日常的にインターネットを利用する機会が増えている。無料通話アプリ LINE などの SNS の利用経験も約7割と多い。インターネットの特性については、朝の会や帰りの会を利用して、繰り返し学習をしている。しかし、SNS の利用によるトラブルがこれまでに全くないわけではなく、今後もそのようなトラブルが心配される状態である。

本日の目標

- ・インターネットの「仕組み」を理解するとともに、人と人とのつながりで大切な「相手を思いやること」や「責任をもって行動する態度」をもとにした判断力を育む。
- ・ネット社会において、ネットワークを通じて他人や社会とよりよい関係を築くことのできる力を身に付ける。

本日の展開

○学習活動	・指導上の留意点
○事前のアンケート結果を紹介し、授業への関心を高める。	・「SNS の使用で気を付けていること」や「SNS でのトラブル経験」に特に注目させる。
○SNS によるグループトークの事例から、問題点を考え、話し合う。	・インターネットは人と人とのつながりであり、相手への伝え方が大切であること、インターネットは文字だけの情報で気持ちが伝わりにくい場合があることに気付かせる。
○各グループで、SNS 等のインターネットをよりよく使うための標語を考え、発表する。	・「日常モラル」と「仕組み」の理解から考えさせ、人と人との関わりにおいて大切なことが「日常モラル」であることに気付かせる。
○本日の活動を振り返り、今後どのように SNS 等やインターネットを使っていくかを記入し、発表する。	・インターネットの特性である「公開性・記録性・流出性・非対面性」は、便利な使い方ができることに気付かせる。

②授業の考察 ～「日常モラル」と「仕組みの理解」に視点をあてた判断力を育成について～

本時では、約7割以上の生徒が、無料通話アプリ LINE などの SNS の利用があるという実態に応じた教材を作成し、授業を行った(資料4)。判断力を育成するための学習場面としては、生徒同士の SNS による「グループトーク」機能を使った仲間の悪口が、「スクリーンショット」機能を使って悪口が広まってしまうという内容とした。その場面を用いた効果として、インターネットの仕組みを理解させ、相手を思いやるなどの日常のモラルの大切さを気付かせることにつながった。

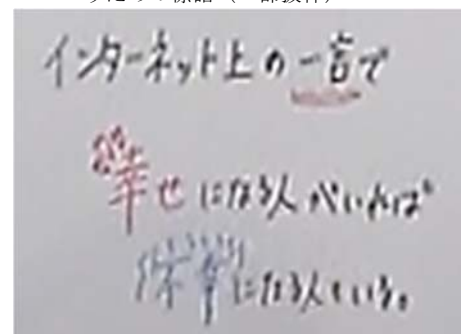
また、「よりよい使い方」を考えさせるためにグループによる標語を作成するという場面を設定した。グループごとに作成したインターネットをよりよく使うための標語は、生徒が以前に学習している「いじめ防止標語」をもとに、「日常モラル」と「仕組みの理解」を踏まえて考えさせた。それによりインターネットの仕組みをより理解させることにつながった(資料5)。

インターネットへの軽はずみな投稿により、相手を傷つけてしまう、一方でよりよい使い方をすることで、他人や社会とよりよい関係を築くという判断力の育成につながると考える。

資料4 授業で使用したグループチャット画面



資料5 インターネットをよりよく使うための標語(一部抜粋)



(4) 検証授業4 中学校1年生 特別活動(2) - (ウ)

～SNSの上手な使い方を考えよう!～

①授業の概要

生徒の実態

生徒の約9割がインターネットを利用し、また、携帯電話やスマートフォン等の情報端末を自分専用として約8割の生徒が所有し、そのうち約7割が小学校高学年から所有しているという実態である。情報端末を友人同士のコミュニケーションツールとして使用していることも多い。友人同士のコミュニケーションにおけるトラブルについては、約4割の生徒が何らかの形で経験をしている。コミュニケーションにおける日常の対面時と、インターネットによる非対面時とで使用する言葉の遣い方に心配な面がある。

本日の目標

- ・学級の一員として、自己及び他者の個性や適性、長所と短所などを理解・尊重する中で、他社への思いやりを深めさせる。
- ・社会生活を営む上で必要なマナーやスキルを習得させるとともに、情報社会におけるインターネットの仕組みを理解させることを通して、情報モラルにおける判断力を育成する。

本日の展開

○学習活動	・指導上の留意点
○事前のアンケート結果を見せ、授業への関心を高めるとともに、既習事項であるインターネットの特性を確認する。	・事前のアンケート結果をもとに、インターネットの4つの特性について特に注目させる。
○SNSによる学級のトラブルの事例から、どのようにすればよかったのかをグループで考え、発表する。	・インターネットの特性をもとに、トラブルのもとになる軽はずみな発言や行動に気付かせる。
○SNSによる良い事例から、よりよい使い方についてグループで考え、発表する。	・インターネットの特性と、自分の発言や行動に責任を持ち、他者への思いやりである「日常モラル」が大切であることに気付かせる。
○これからSNSをトラブルなく使うために、どのようなことを心がけるのかをインターネットの特性と日常モラルの面から考え、発表する。	・「日常モラル」と「仕組み」をもとに考えさせ、日常に対面で接している時と同じように、相手を思いやり、言葉遣いや態度により気をつけることに気付かせる。

②授業の考察 ～「日常モラル」と「仕組みの理解」に視点をあてた判断力を育成について～

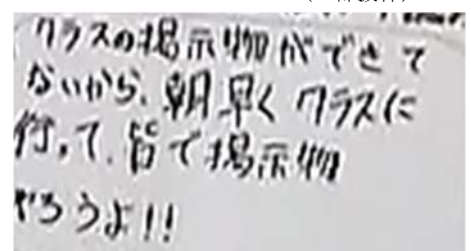
本時では、約8割以上の生徒が、無料通話アプリ LINE などの SNS の利用があり、さらに生徒の約4割が何らかのトラブルの経験があるという実態に応じた教材を作成し、授業を行った(資料6)。各グループでは、「SNSのよりよい使い方を考えるために、良いアイデアを提案しよう!」という課題について話し合いを行った。「朝はやく来て、みんなでそうじをして先生をおどろかそう!」「クラスの掲示物ができてないから、朝早くクラスに行って、皆で掲示物やろうよ!!」「〇〇の誕生日を昼休みにクラスの皆で教室に集まってお祝いしようぜ!」等のよりよい使い方について、インターネットの仕組みを理解した上で、生徒が主体的に考える場面をみることができた。

この学習活動により、インターネットの仕組みの一つである非対面性ばかりではなく、公開性や記録性、流出性等の理解が深まったと考えられる。また「SNSを人助けに使いたい」という意見もあり、「日常モラル」の視点からも、よりよい使い方を考えさせる学習の効果として、判断力の育成につなげることができたと考える。

資料6 授業で使ったグループチャット画面



資料7 グループで考えたよりよい使い方 (一部抜粋)



Ⅲ 研究のまとめと今後の課題

1 研究から見えてきたこと

(1) 「日常モラル」と「仕組み」の理解による判断力育成の効果

本研究の主題では、「日常モラル」と「仕組みの理解」の視点もとに、判断力の育成につなげることを授業のねらいとした。

その手立ては、判断力の育成に効果的であった。児童生徒の判断力育成のために多岐にわたる情報モラルの指導内容をキーワード化する等工夫をしながら焦点化する手立ても、大変有効であった。

また、検証授業を行った授業者の感想として、「情報モラルの授業に対する意識が変わった。」(資料10)等から、判断力育成のために、教師が自信をもって取り組める手立てであることも見えてきた。

(2) 小学校低学年からの発達段階に応じた情報モラル教育の重要性

本研究では、小学校2年生で検証授業をこころみた。小学校低学年段階においてインターネットの仕組みを概念的に理解させることは非常に困難であるが、発達段階に応じた将来的なインターネットの仕組みの理解のつながりについて考えさせることで、主体的な学習につながった。義務教育9年間を見据えた時、小学校低学年での日常モラルの育成とともに、インターネットの仕組みの理解につながる学習を行うことは、将来的な情報モラルの判断力の育成に非常に重要であると考えられる。

(3) 保護者との連携の効果

小学校6年生の検証授業後児童に「おうちさんに授業の内容で学んだインターネットの4つの特性を伝えて、感想をいただいてくること」という課題を与えた。保護者の反応としては、学習内容に高い興味を示す方がほとんどであった。児童にとって学習内容をもう一度自分の言葉で親に伝えることは、インターネットの仕組みの理解を深めることにつながった。保護者に情報モラルを講演会等の機会を通して伝えることは大切であるが、それ以上に、情報モラルについて学んだ内容を児童生徒が自宅で親に伝える機会を増やすことで、保護者とさらなる連携が期待できるであろう。その取り組みを計画的に行うことで、児童生徒の判断力の育成に確実に繋がっていくと考える。

今までは「インターネットに関するトラブルをどうなくすか」を、項目立てで「あれはダメ、〇〇はしない方が良い」という立場で指導していた。しかし、この研究を通して情報モラルを定着させ、一人一人に良い判断をしてもらうためにインターネットの仕組みとともに、日常的なモラルと繋げて考えさせる必要を実感した。

2 今後の課題

今回の研究では判断力の育成の手立ては検証により有効であることはわかった。今後は、どの教科等で判断力を身に付させればよいのかというカリキュラムに位置付けるための資料開発が課題である。保護者の連携では、効果的な判断力の育成のためにさらなる連携の在り方を検討していく必要がある。

最後に、研究を進めるに当たり、ご指導ご助言をいただいた先生方、また、研究員所属の校長先生をはじめ教職員の皆様に心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|--|---------|
| 文部科学省「教育の情報化に関する手引き」 | 2010年3月 |
| 株式会社情報通信総合研究所「情報化社会の新たな問題を考えるための教材～安全なインターネットの使い方を考える～指導の手引」 | 2014年3月 |
| 川崎市総合教育センター「研究紀要 第28号」 | 2015年3月 |

【指導助言者】

- | | |
|-------------------------------------|------|
| 目白大学社会学部メディア表現学科教授 (川崎市総合教育センター専門員) | 原 克彦 |
|-------------------------------------|------|